

日本のマンガにおける女性たち

馬 韻賢 (マ・ワンイン)

1. はじめに

漫画は日本の流行文化の一つである。小学生だけではなく、大人までも読むようになった現代娯楽のひとつである。最近の漫画では、女性キャラクターが多くなってきている。漫画の中の女性キャラクターたちは、一体、マンガの中においてどのような役割をしているのだろうか。彼女たちは、どんなイメージをつけられているのだろうか。本研究では、今の少女マンガと少年マンガをメインとして、その中の女性キャラクターを見てそれらを明らかにしたい。

1.1 恋愛感情に基づいて行動する女の子像

「恋愛立国としての『女の子の国』」「女の子の国は夢と星と愛の世界である」と斉藤美奈子が言っている (斉藤 1998)。よく考えて見ると、確かにそうだ。少女マンガと言えば、「恋愛」と言う言葉が必ず出てくる。「恋愛」と言うテーマは、少女マンガのモチーフになっている。以下、典型的な例を示すために、いくつかの作品を要約し、分析を行う。

<聖はいばあ警備隊>～学園のラブコメディ

森生まさみに描かれた、学園を舞台としてのラブコメディストーリー。舞台である「東郷高校」は元男子校だが、新学期から男女同校になる。その東郷高校へ入学した女子は20名。ヒロイン梨本つぶらはそのひとりである。女子生徒を守るためにはいばあ警備隊 (実際は風紀委員) を設立したが、さっそく委員長高屋敷昂と恋に落ちた。両思いだったが、天性のあまのじゃく娘つぶらは素直に昂とつきあうことができない。そしてひよんなことから男装してはいばあ仮面になったつぶら。風紀委員長改めはいばあ警備隊長高屋敷昂、生徒会長黒峰氏、理事長の孫娘ミスアニー、影のZらを交え、広大な東郷高校で繰り広げられる学園パニックアクション。

梨本つぶらは一般の少女マンガのヒロインとあまり違いがない。楽観的でかわいくて、女同士とわいわいして、好きな人ができたら一生懸命がんばるタイプだった。しかし、そんな彼女は好きな相手の前に素直できないところをずっと悩んでいる。いつも高屋敷に「キライ」「つきあわない」など言っているが、実は誰よりも彼のことを大切に思っ

ている。彼のために、自分が犠牲になってもかまわないと思っている。「虹のかもめ」調査団の一件（マンガ文庫版第三巻参照）の中に、高屋敷が転校させられる可能性があるを知るつぶらは、鮎川（Zであり高屋敷のライバル）に「オレなら、なんとかできなくもないけどさ」と言った。その条件は、つぶらのファーストキスだ。ファーストキスは女の子にとって、重大の意味を持っている。だが、高屋敷のために、「これくらいなんでもないことよ」と自分に言った、たとえ「それ」が自分に対してどれくらい大切な事だとわかっているけれども、彼女は自分より「愛」を選んだのである。

<少女革命ウテナ¹>～王子になりたい女の子

『主人公天上ウテナは、幼い頃自分を助けてくれた王子様に憧れる少女である。だが、彼女は、いわゆる王子様がいつか迎えに来てくれるのを待つお姫さまではない。王子様本人に憧れるあまり、自分が王子様になりたいという願望を持つようになった少女だったのだ。鳳学園に入学したウテナは、そこで「薔薇の花嫁」と呼ばれる少女、姫宮アンシーと、天上ウテナが王子様から貰ったのと同じ指輪「薔薇の刻印」を持つ生徒会役員に出会う。彼らは、「世界の果て」という謎の人物からの手紙に従い、「薔薇の花嫁」を賭けて決闘を繰り返していた。薔薇の花嫁とエンゲージしたものに与えられるという、「世界を革命する力」を得るために。そして、ウテナもまたこの決闘ゲームに巻き込まれていく。』²

さいとうちほに描かれた（原作：ビーパパス）少女マンガだ。主人公天上ウテナは、女の子だが姫様ではなく、王子様を目指す点において、少女マンガのヒロインとしては珍しい。ウテナは常に男装しているのは、王子様への憧れの表現でもあったのだ。「お姫様より、王子様のほうになりたい」と主張しているウテナは、性格が強気で運動万能で、学園の女生徒たちのアイドルになった。「薔薇の花嫁」の決闘の中でも、彼女は剣道とフェンシングの使い手である生徒会の役員たちに勝った（桐生との決闘だけは一回負けた）。マンガの最後に、絶望して消えかけているアンシーを助けるため、ウテナはアンシーの王子様になると言っていた。

確かに、従来の少女マンガのヒロインたちと比べれば、ウテナは強い。しかし、彼女を強くさせるのは幼いころ、その幻の王子に助けられたからだ。ウテナは、自分が王子様が言い残した「強さ、気高さ」を持つ者になれば、絶対またあの王子様と再会すると信じていた。つまり、彼女が強くなりた理由は、あの王子様と再会することだったのだ。これは一般的な少女マンガの女の子が「好きな人のために」という原理と同じである。そして、彼女は桐生との最初の決闘に負けた。その理由は、桐生は「あの王子

¹ この作品が連載している同時にアニメもあったのだ。ストーリー、登場人物と結局などことはマンガ違う点がある。ここにとり上げるのはマンガ作品の「少女革命ウテナ」である。

² <http://ja.wikipedia.org>

様」ではないだろうかとうテナは疑っていた。桐生は自分の幼いころのこと、王子様に助けられた事を知っていて、桐生自分もウテナに「私はあなたの王子様だ」と言っていたからだ。そのほかに、桐生は何回も「あなたの事が好き」とウテナに言って、ウテナは女の子のことを強調する。ウテナは動揺した。結局、ウテナは桐生が自分の王子様ではなかった事を知り、桐生にもう一度決闘を申し、アンシーを取り返した。

しかしその後、ウテナの前に、アンシーの兄であり、学園の理事長代理でもある鳳暁生が現れた。ウテナはまた彼に惹かれ、自分の王子様ではないかと思い、恋心を抱くようになる。たとえウテナは暁生がこの決闘ゲームの黒幕「世界の果て」である事を知り、彼がしようとしていることに協力してはいけないとわかっているにもかかわらず、彼女は自分の気持ちを抑えられなかった。結局、彼女はアンシーの代わりに、暁生の「薔薇の花嫁」になった。(第4巻)

天上ウテナの「王子様になりたい」というのは、「男になりたい」と願っているわけではない。よく見ると、彼女の行動は、「王子様」と深くかかわっている。女である彼女は、自分が憧れる王子様のお姫様になりたいとの願いを持っているのだ。

このように、少女マンガは「恋愛」に基づいて語られるものが多い。女子キャラクターには、「恋愛」が彼女たちを「動かす」力となっており、感情重視のイメージ、が付与されている。

1.2 「守られる」女の子像

漫画世界には、あるパターンがいつも見られる。それは、男の人が女の人を守る場面だ。特に少年漫画の中に、このような場面が多いのである。男の人はたいていけんかにある程度強く、捕われたヒロインを助けるため敵に立ち向かう。そして強敵を倒しながら自分も強くなる。一方、女の人はずっと男の人に守られる役になっている。またヒーローにとってよき協力者、助言者などの役割をもっている。「女の子は可愛くて、男の子を陰から支える存在」として描かれていることが多い。ここで、例を挙げて説明したいと思う。

<エレメンタル ジェレイド>～姫を守る騎士の物語

『天空に浮かぶ島々を巡り、空賊と呼ばれる空の盗賊達が飛び交う世界・ガーディア。風の空賊団「紅山猫(レッドリンクス)」に属するお調子者の少年クーはある日盗んだ財宝の中から古びた大きな箱を見つける。箱の中には1人の少女が眠っていた。クーが手を触れると少女は目を覚まし、クーに「エディルガーデン」と呼ばれる地に行きたいのだと語り出す。だが、クーには何のことなのか分からない。その時、「エディルレイド

完全保護協会・アークエイル」を名乗る、シスカ、ローウェン、キアという3人がクーの前に現れる。聞けば、クーが目覚めさせた少女を引き渡してほしいのだという。少女の名はレン。彼女は人間ではなく、人の姿をした生きた武器「エディルレイド³」だった。人間に利用される事を恐れるレンを守り、また、彼女が行きたいと望む場所へ連れて行く事を決意したクーはレンと共に、そしてなぜか同行することとなったアークエイルの3人とも一緒にエディルガーデンの地を目指すのだった。』⁴

これは現在マッグガーデン発行の漫画雑誌「月刊コミックブレイド」連載（原作：東まゆみ）している〈エレメンタル ジェレイド〉のあらすじだ。クーはレンと出会う前に、ただごく普通の空賊団の一員だ（しかもまだ半人前）。彼の目標は、もともとすごい空賊になることだが、レンとの出会いは、彼の人生を大きく変えた。彼の目標は、レンを守り、「エディルガーデン」へいくことになる。レンは幻の種族「エディルレイド」であり、しかも中でも桁外れに能力が高く希少価値も高い七煌宝樹⁵の一人である。その理由で、クーとレンは狙われることとなった。

半人前であるクーは決して強くはないが、レンに「一緒にいく」と誘ったのは、「女の子が一人で遠いところに行かせられるわけがないだろ」という理由で、つまり、「女の子が一人で旅するのは危ないだろう」と思っているからだ。レンと一緒に旅することは、純粹に彼女を守りたい気持ちだけだ。彼女の正体は人間ではなく、武器であることを知っていても、クーは彼女を「武器」として扱わない。彼はただ彼女のことを「普通の女の子」として見て、そして彼女の願いを叶えただけだ。旅の途中、たくさんの敵に狙われ、クーは結局レンと同契（リアクト⁶）してしまったが、クーはできるだけリアクトしないように戦うのだ。なぜかというと、彼がレンを戦わせたくないからだ。レンは女の子だ。女の子をしっかりと守るのは男である自分がやるべきことだとクーが信じている。そして、レンは確かに武器なんだが、同契者がいないと普通の女の子と同じだ。レンは実は自分を守る力がない。危険があるときでも、レンはやはりみんなに守られることが多い。

だが、クーとリアクトしたら、レンも戦えるだろう？確かにそうだが、レンは直接に戦うわけではなくて、「クーの力になって戦うこと」、クーの協力者でしかない。結局、レンの役割はこの「姫を守る騎士の物語」の姫だ。クーがいなければ、彼女は自分を守れないし、クーがいても、リアクトしないと、彼女はやはりクーに守られることしかできないのである。

³ 特定の1人の人間との「同契」により、己の肉体を武器へと変える種族。外見は人間の女性と変わらない

⁴ <http://game-mix.seesaa.net/archives/200506.html>

⁵ 世界に7つあると言われる最強の力を持ったエディルレイドの血統。

⁶ エディルレイドがその姿を戦闘形態（武器）へと変え、プレジャーと融合すること。各エディルレイドが同契できるのは特定の1人の人間とだけであり、その人間が命を落とすまで別の者をプレジャーとすることはできない。

＜ゲットバッカーズ奪還屋＞～万緑叢中紅一点⁷

この作品は現在講談社の週刊少年マガジンにて連載中の漫画(原作：青樹佑夜/漫画：綾峰欄人)だ。主人公は『奪われたら奪い返せ』を信条にして、東京新宿に「ゲットバッカーズ奪還屋」をやっている美堂蛮と天野銀次である。二人は東京新宿にある喫茶店「HONKY TONK」で、仲介屋ヘヴンから、「HONKY TONK」での飲み食いしたツケを払うべく報酬のいい仕事にありつこうとしていた。「仕事」の内容はほとんど危険で、二人は仕事を完成するためにたくさんの敵と戦っていた。

この漫画の中に出てくるのは男性が多く、女性が非常に少ない。メインキャラクターと言えるのは四人しかいない。この中の二人は喫茶店「HONKY TONK」の店員で、一人は仲介屋ヘヴンだ。戦闘技術はなく、あっても低いので、彼女の戦闘シーンは少ないが、度々敵に捕らわれていることがある。そして、ここに話したいのは、この四人の最後の一人：工藤 卑弥呼だ。

工藤卑弥呼はメインキャラクターの中に、唯一戦闘力がある女性である。レディポイズン (lady poison) との異名を持っている。千数百種もの『毒香水』の中から仕事に応じて七つを厳選して装備する、超一流の『運び屋』だ。『毒香水』とは、その香りを吸い込んだ者に様々な症状を引き起こす香水や、自分自身の能力を極限までに引き出す香水だ。この手段を使って、常に敵を自在に翻弄する。しかし、そんな強い彼女でも、結局美堂蛮に勝つことができなかった。(巻3 ACT.3 奪還屋 VS 運び屋) 確かに、彼女がだんだん強くなっていくが、作品の中に彼女が自力で男の相手と戦って勝ったことがあまりなかった(ザコ除く)。

彼女のようなキャラクターは少年漫画のなかによく出てくる。女性キャラクターはどんな強くても、必ずヒーローに勝つことができない。ピンチになったとき、ヒーローに助けをもらうことも多い。例えば、鏡形而との戦いの中に、あっさり負けてしまった卑弥呼が、殺されそうになったとき、思わず蛮の名前を口にした。(巻9 99頁) ここに見られるのは、例え強くても、やはり男性であるヒーローの力が必要であることだ。

少年漫画のヒーローは、自分より強い相手と戦いによって、自分自身ももっと強くなっていく。そして、女性キャラクターは彼らの強さを表すために、弱いイメージをつけられたり、またはヒーローの心を支える役割をするイメージをつけられる(例えばくろろくに剣心>の神谷薫と雪代巴)。少年マンガのヒーローを「花瓶の中の花」だと喩えれば、ヒロインはその花のきれいさをあらわすための「花瓶」だ。そんなの彼女たちは、「弱い」、「守られる」とのイメージを漫画に定型化されてしまっている。

中川裕美が『少女小説から生まれた現実には存在していない少女のイメージは、社会や男性によって現実の少女に付加され、置き換えられていった。このようにして「少女

⁷ 男の中に女が一人との意味(斉藤美奈子『紅一点論』5頁)

的なイメージ」は「少女」そのものとして考えられるようになっていき、「少女幻想」へと続いていったのである。』と言った。つまり、「少女」は「社会や男性によってつくられた」。ここにちょっとこのことについて話してみようと思う。

少年マンガのヒロインたちは、男の人に守られる役になっている。またヒーローにとってよき協力者、助言者などの役割をもっている。ヒロインは男性であるヒーローの強さを強調するために弱いイメージがつけられている。少年マンガは男性向きだから、男性からの視点であることと関係あるだろう。なら、少女マンガはどうだろう。

前に少女マンガについて、「少女マンガの女の子たちは恋愛感情に基づいて行動する」と話した事がある。恋愛という元素は少女マンガの中にモチーフになっている。しかし、「少女マンガのモチーフの核心は、自分がブスでドジでだめだと思っている女の子が憧れの男の子に、「そんなキミが好き」だと言われて安心する、つまり男の子からの自己肯定にある」と藤本が言っていた。(藤本、1998) 確かに、これは少女マンガのヒロインの希望である。自分がどんなに不器用だとしても、相手に自分が好きになってくれてほしい。この前に例としてあげたく聖はいばあ警備隊のヒロイン梨本つぶらもその一例だ。彼女は好きなかれのために、いろいろがんばっていたが、自分は天邪鬼の性格のせいで、好きな人に素直になれないし、何度も「あなたは嫌い」と相手に言っている。しかし本当は、好きな彼に「こんな私を嫌いにならないでほしい」と心の中に思っている。そんな少女的な価値観と思われる「恋愛」は実際、男性からの価値観がかなり重要な地位を占めている。

意外に、少年マンガだけではなく、少女マンガの「少女」のイメージも男性に影響されている。しかし、「少女のイメージは男性によってつくられた」というより、「伝統意識に影響されている男性につくられている」という言い方のほうがいいではないかと思っている。少年マンガの戦うヒーローと守られるヒロインは、昔のおとぎ話の王子様とお姫様のイメージに影響されている。少女マンガの少女たちも、昔の日本の女性のイメージに影響されているのではないか。昔の日本社会は男性が強い社会で、女性にとって、夫のことは絶対である。そして、昔の女性は男性からの自己肯定を通し自分の居場所を確立する。もちろん、現在は必ずそうではない。しかし、この「男性からの自己肯定」の意識はまだマンガの中に残っているかもしれない。

1.3 サービスのための女性

最近のマンガ家は読者たちに『読者サービス』することが多い。『サービス』とは何か。簡単に言えば、それは英語の「SERVICE」と同じ意味だ。だが、マンガ家はお客さんを接待する仕事でもないし、どうやって読者たちをサービスするのか。無論、自分のマンガでするのである。例えば、「女性キャラクターがお風呂が入っているところ」の

シーンを、読者たちに見せるのがサービスの一例だ。

一般的に、サービスはマンガの内容や流れなどに影響することはない、あるいはマンガ自身の内容とまったく関係ない。ただ読者たちに見せるだけだ。もともと読者にとっては、これは「あればいい、なくても損もない」ものだが、最近の男性向けのマンガを見ると、この「サービスする」意識がだんだん強くなっている。女性キャラクターのスタイルはありえないほどいいし、女性キャラクターの露出シーンも昔のマンガより増えていく傾向がある。

<一騎当千>～爆乳女子高生の戦い

日本マンガ雑誌「月刊 Comic GUM」（ワニブックス）に連載中のマンガだ（原作：塩崎雄二）。中国にとっても有名な「三国志」を基にするマンガ作品。三国志の英雄たちの魂を封じ込められた勾玉を持ち、彼らの宿命を受け継いだ高校生たちによる格闘マンガ。この作品は17歳の主人公、女子高生孫策伯符からはじめ、キャラクターたちの名前が三国志の登場人物からつけられている。

この作品の女性たちは、すごくかわいいのだが、メインキャラクターである孫策伯符や呂蒙子明などは、上がつけているタイトルの通り、胸が非常に大きい。それだけでなく、制服のスカートが非常に短いため、下半身はほとんど露出状態で、普通に走っても簡単に下着も見られる。なお、このマンガは格闘をテーマとしているから、大量な格闘シーンも描かれている。その中に、攻撃を受けて服が切り裂かれたシーンも入っている。（巻1 25頁）

作者は女性たちの胸を強調するシーンが多く、ヒーローである周瑜公瑾を通して、性的イメージを連想させる場面をマンガの中にも描かれている。例えば、公瑾が朝お風呂に入ったとき、朝寝ぼけている伯符は裸のままに風呂に入ってしまった。（巻1 74頁）そのシーンは、伯符の乳首と性器の部分が湯気に隠されたが、実際は全裸とほぼ同じだ。

<ラブひな>～同じ屋根の下に住む一人の少年と少女たち

週刊少年「マガシン」（講談社）に連載した少年マンガ（原作：赤松健）。主人公浦島景太郎は幼い頃の約束を果たすため、東京大学を目指していたが、もう2年落ちていた。そして、家に追い出された彼が、祖母が経営する東京近郊の温泉旅館に頼るのだが、昔の旅館はいま女子寮「日向荘」になっていた。そんな彼が、祖母に寮の管理人になれと言われ、六人の女の子と一緒に暮らす事になった。

大量な「サービス」シーンはこの作品の特徴のひとつだ。第一話、景太郎は旅館のお

風呂でヒロインである成瀬川なるの裸を見てしまったことから始まり、各キャラクターも景太郎に胸を触られたり、下着や着替えを見られたりすることもある。確かに景太郎はわざとをするのではないが、作品の中にちょっとドジな彼が不本意で、何かの「事故」によって、女性の服を抜いたシーンたびたびある。

最初に述べたように、「サービス」とマンガ自体の内容はあまり関係ない。〈一騎当千〉のテーマは格闘だから、キャラクターが足をあげて敵を蹴ったり、攻撃を受けて服が切り裂かれたりするの合理的だが、わざと露出度が高い服を着させる必要はないし、服を八割ぐらい切り裂かれる必要もない。〈ラブひな〉のサービスシーンも主に読者たちに笑わせるためだが、女の子の体を触ることは面白いことか。女性にとって、それは絶対面白くないはずだ。景太郎が何回も何回も同じ事をやったが、結局女性群に殴られ済まされたが、実際にはそんなに簡単にすませられることだろうか。彼女たちはただ、「男にとって都合のいい女」であり、読者に興味を持たせて読ませる手段であるだけとなっているのだ。

2. 日本のアダルトコミック

マンガの生産量が多いことで非常に有名である日本は、アダルトコミックの生産量も少なくではない。別にセックス行為自体を反対するのではないが、「一部のコミック本やビデオショップのアダルトコーナーでは、セックスの対象として女性を扱っているものがずらり。痴漢やレイプなどを題材に、性的対象というゆがんだ価値観で作られています」⁸。ここには、コミックだけをとり上げ、話したいと思う。しかし、ここにとり上げのアダルトコミックは、一般的の商業誌だけではなく、同人誌⁹も含めている。

痴漢行為もレイプも、暴力を行使して女性を犯す行為だ。だが、アダルトコミックの中に描かれている女性たちは、弱者のイメージをつけられることが多い。男性たちの暴力を抵抗したあげく、犯されてしまう場面が多い。しかも、犯された女性はそのセックス行為によって快樂がもらえると描かれている。また、アダルトコミックの中に一部の女性は、「痴女」のイメージをつけられ描かれている。自らの願望により男性とセックスする。アダルトコミックの中の男性にとって、女性はただ性的対象として扱われていて、そして女性を男性の意のままにモノ化してしまう。

⁸こうち男女共同参画センター情報紙ソーレ・スコープ 第八号 <http://www.sole-kochi.or.jp/jyoho/fs/m0s00s6.htm>

⁹同人誌とは主義、傾向、趣味などを同じくする人たちが、自分たちの作品の発表の場として共同で編集発行する雑誌とのことだ。正式な出版社ではないため、費用は全部自費だ。そして、同人誌コミケに売ったり、また同人誌専門店を委託して売ったりする。その中に、また自作である「オリジナル」ものとアニメやゲーム、小説などの既存の「キャラクター」物語や設定を借りて、自分なりの別の作品を作り上げる「二次創作」ものも分けてある。

そのほかに、一部の同人誌もこの現象がある。同人誌専門店に、大量のアダルト同人誌が売られているし、サイトでもこういう同人誌が見られる。犯された女性は、ほとんど普通（非18禁）のマンガやアニメからのヒロインである。例えば、＜カードキャプターさくら＞の中のさくらがアダルト同人誌に改編され、中にさくらが何人にも犯される場面が描かれている。

今のアダルトコミックの題材はだんだんおかしくなっている。もう痴漢やレイプだけではなく、近親相姦、SM などでも取り上げられている。性と暴力で女性を支配しようとする意識はアダルトコミックの中に満ちている。道徳意識も捨てられた上、男性にとって女性はただのセックスするためのモノになってしまっているようだ。

3. 香港のマンガ

日本マンガのジャンルが多いに対して、香港マンガはそんなに多く分かれていない。分けるとすれば、格闘を中心とするマンガと恋愛を中心とするマンガしかない。といっても、香港の恋愛マンガは「FEEL 100%」というマンガしかない。そして格闘マンガは、だいたい香港人が格闘ではなく武俠¹⁰マンガと呼ぶマンガ（例：「風雲」）とチンピラの物語を語る格闘マンガ（例：古惑仔¹¹）に分かれている。¹²

現在香港マンガの中に、外国人に一番知られているのはおそらく「風雲」（フォンワン）だろう。なぜなら、このマンガは1998年に映画化され、原作より映画のほうがよく知られているからだ。「風雲」は、1989年から連載が始まり、今は第三部にまで続いている。

『時は戦国、武術界では天下統一を目指し、男達の熾烈な争いが繰り広げられていた。そんな中、やはり覇権の野望を持つ“天下会”の雄覇（ホンファ）は、占い師の泥菩薩から「金の鱗をもつ魚は風雲に会い龍となる」という予言を受けた。すなわち風（フォン）と雲（ワン）の二人を手に入れば、今後の人生の前半は無敵となるというのだ。雄覇は“風”の父親であり、宿敵でもある囃人王を激しい戦いの末打ち負かし、“風”を手に入れた。一方“雲”を探す天下会の一行は、殺戮が繰り広げられる中で“雲”を見つける。連れ去ろうとする一行を父親は身をもって阻止しようとするが、一行が振りかざした刃に崩れ落ちた。こうして二人が雄覇の弟子となって、十年の時が過ぎた――風と雲を得た雄覇は確実にその勢力を増し、いまやその敵と言えるのは剣聖のみであ

¹⁰基本は中国武術ですが、空を飛んだり、拳の一撃で地面が割れたりというSF的なスーパー・アクションが基本です。

¹¹「古惑仔、陳浩南の出世青春物語。手下に裏切られたり、死なれたりしつつも、数多くの侠客と出会い、出世街道を上って行くと言う話し」。(香港漫画指南：<http://homepage2.nifty.com/hkcomics/index.htm>) 香港の漫画の中でもかなり暴力なものである。当サイトの管理人の感想は：「女の子が買ったり読んだりするにはかなり勇氣がある。そりゃもう現地では本物の古惑仔しか読んでないんじゃないかと思うくらい。入れ墨彫りの広告とか載ってるし。あとエロだらけ。」

¹² もちろんほかにもあるが、だいたいコンフーマンガや武俠マンガぐらい。

った。一方、風と雲は共に育った雄覇の一人娘、孔慈（シウチー）に想いを寄せるようになっていた。ある日雄覇は雲に無双城へ行き、無双剣と一方（ヤッフオン）の首を持ち帰るように命令を出し、風と霜（シオン）には人生の後半を占うべく、失踪中の泥菩薩を捜しだすよう命じた。配下の蝙蝠（ピンフ）と麻鷹（マーイン）を従えた雲は、無双城一門を虐殺し、冷徹に命令を実行に移していた。また、大役を果たした風と霜だったが帰城の途中、泥菩薩を何者かに奪われてしまう。泥菩薩を奪い去ったのは姿を変えた他ならぬ雄覇だった。監禁された泥菩薩のあらたな予言とは「天地を揺るがす昇り竜、風雲に遭い翳りゆく」。雄覇自身が弟子の風と雲によって滅ぼされるというものであった。雄覇は天命に背き、運命を変えるべく風と雲を弊す策略を巡らすのだった。』¹³以上は映画化された「風雲 ストームライダーズ」のあらすじだ。内容はだいたい原作の第一部の前半、雄覇を倒すまでの話である。

香港のマンガの表現形式は日本のマンガとは違う。香港のマンガは主に写実的な表現形式と使っている。しかし、香港のマンガ家は日本のマンガの影響を受けていることが多い。

「風雲」を描くマンガ家馬榮成は、最初マンガを描くときが池上遼一のマンガや表現形式を参考にしたと、自伝の中で語っている。もう一人のマンガ家司徒劍橋の作品は、日本のマンガ、アニメやゲームのキャラクターを参考して描くものが多い。例えば、<超神Z>（1993）と<拳皇Z>（2000）は日本のゲームストリートファイターズとザ・キング・オブ・ファイターズの内容を参考して書いた作品である。そして、日本のマンガを参考しながら、日本とアメリカのコミックと違い、香港の独特のマンガが発展してきた。だが、マンガの内容はやはり武俠や格闘が中心となっている。

他方、香港マンガの中の女性たちは、いったいどのような役割やイメージが付与されているのか。実際、女性キャラクターの数は多くとは言えない。「風雲」は第三部まで連載していても、メインキャラクターと言える女性は20人までもいなかったらう。力がない彼女たちは、ずっと戦っている男性たちにとって、静かに、心を休めるオアシスに似たような存在である。しかし、男性向けのマンガのせいか、女性キャラクターはそんなに重視されているようではない。

4. 日本のマンガの影響

¹³ <http://www.nifty.com/stormriders/story.htm>

日本のマンガは世界で流行っている。アジアとヨーロッパでは、ドラゴンボールやセーラーMoonなど、日本の有名なマンガが翻訳されている。そして、最近、日本のマンガを真似して描かれた海外マンガも増えている。子どもの頃から日本のマンガに夢中になり、自分で努力してマンガの描くこと練習し、そして自分の作品を出版社に投稿することにより正式的にマンガ家になることもあるし、コミケなどイベントで作品を発売しているうちに、出版社の人に気に入られて採用されることもある。そのほかに、日本のマンガの内容がドラマになったこともある。例えば、台湾のテレビドラマ<流星花園>は、日本のマンガ<花より男子>より作られたものだ。マンガは今、日本の文化をほかの国に紹介するひとつの手段になっている。そして、マンガを通して、各地の人々の交流も増えている。

5. おわりに

最初「マンガにおける日本の女性像が下がっていく」と主張する私は、研究しているうちに自分が間違っているのではないかと思った。確かに女性が弱い、守られるイメージが多いが、別にわざと女性のイメージを低くするのではない。しかし、「マンガにおける日本の女性像が上がっていく」とは言えない。なぜかというと、昔からの伝統意識はまだ人々の心に残されている。少年マンガと少女マンガの「少女」たちのイメージは、上述したように、昔の人々の考え方に影響され作られている。また、アダルトコミックの中の歪まれた女性像は、女性を性的対象として扱われる現象を重視するべきだと私は思っている。おかしくなっているアダルトコミックのテーマや、性と暴力で女性を支配しようとする意識は、それらを読む人々に性についての理解を誤らせる可能性があり、その中にある非行や犯罪（痴漢やレイプ）を模倣することで犯罪数が増加する可能性もあると私は思っている。

参考文献

- 井上輝子 江原由美子「女性のデータブック（第3版）」、有斐閣、東京、2000
斉藤美奈子 「紅一点論」、ビレッジセンター 1998
斉藤環 ほか 「少女たちの戦歴」 青弓社 1998
藤本由利香 「私の居場所はどこにあるの？」 学陽書房 1998
<http://www.sole-kochi.or.jp/jyoho/fs/m0s00s6.htm> こうち男女共同参画センター
情報紙ソーレ・スコープ 第八号
<http://tc.cabeat.com/index.htm> 動漫線 04年12月号 (中国語)
http://members.at.infoseek.co.jp/wind_cloud/
<http://homepage2.nifty.com/hkcomics/index.htm> 香港漫画指南
<http://www.k3.dion.ne.jp/~n-hiromi/gyouseki/soturon.html>